

《2007年11月例会報告》

【日時】2007年11月28日（水）19:00～21:00（その後「ルン」～23:30）

【会場】筑波大学附属高校3F会議室（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】辺境地のサッカー報告

－極東ロシアサッカー紀行&バヌアツ共和国で感じたこと（第2報）

【報告者】極東ロシア：大久保尚彦、バヌアツ：岸卓巨

【参加者（会員）】牛木素吉郎（ビバ!!サッカー研究会） 大久保尚彦（フットサルチーム「大久保商店」代表） 加納樹里（中央大学） 岸卓巨（中央大学4年/DUOリーグ事務局） 高田敏志（町田高ヶ坂SCコーチ） 中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（未会員）】杉田文章（多摩大学）、小松弘樹（フットサル取手店長）、武藤太智（ACアンマリアトーレ）

【ルンからの参加者】熊谷建志

【報告書作成】岸卓巨&大久保尚彦

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

辺境地のサッカー報告

第1部：極東ロシアサッカー紀行

大久保尚彦

第2部：バヌアツ共和国で感じたこと（第2報） 岸卓巨

第1部：極東ロシアサッカー紀行

－ウラジオストックからユジノサハリンスク－

大久保尚彦（フットサルチーム「大久保商店」代表）

極東ロシアサッカー観戦紀行－ウラジオストックからユジノサハリンスクと題して、フットサルチーム「大久保商店」代表、大久保尚彦が発表いたします。

はじめに、旅行の行き先については、以下のとおりです。去年（2006年）8月にウラジオストックとナホトカ、今年（2007年）7月にウラジオストックとユジノサハリンスクに行って参りました。

1. はじめに

ロシア連邦は、ヨーロッパとアジアにまたがる世界最大の領土を持つ連邦制の共和国です。ロシア連邦およびロシアは双方とも正式名称です。首都はモスクワで、人口が約1億4千万人です。ロシアは、85の連邦構成主体と呼ばれる地方行政体からなる連邦国家です。連邦構成主体のうちには、非ロ

シア系民族が住民の主体を占める地域にある 21 の共和国が含まれますが、これらの共和国には連邦からの分離独立権がなく、連邦中央政府の強いコントロール下に置かれているため、実質的には民族自治区と異なりません。

こちらは、ロシアの連邦構成主体区分図です。黄緑色の部分が共和国です。

ロシアリーグの歴史についてご説明します。91 年まではソ連としてリーグが成立していたのですが、ソ連崩壊のため 92 年からはロシアリーグとなっています。旧ソ連時代のレギュレーションはごらんの通りで、トップリーグであるソ連リーグ、その下にファーストリーグ、セカンドリーグがあります。一方、ロシアプレミアリーグでは、トップリーグであるロシアプレミアリーグ、その下にディビジョン 1、ディビジョン 2 があります。

過去の歴代優勝チームについて、旧ソ連時代はごらんの通りです。最も優勝回数が多いのはウクライナのディナモ・キエフで 13 回です。また、ロシアのスパルタク・モスクワや CSKA モスクワが優勝していますし、アルメニアのアラト・エレバン、ウクライナのシャフタール・ドネツクやグルジアのディナモ・トビリシ、ベラルーシのディナモ・ミンスクも優勝しています。

一方、ロシアプレミアリーグではスパルタク・モスクワが最も多く、9 回優勝しています。

ロシアプレミアリーグについては、16 チームによるホームアンドアウェイの総当り 2 回戦です。下位 2 チームがディビジョン 1 のチームと入れ替えとなります。気候の関係でシーズンは春から始まり、秋に終わります。

今年のロシアプレミアリーグの在籍クラブについてですが、ご覧の通り 16 チームあります。ロシアが多民族国家ということもあり、クラブによっては民族が異なっています。

こちらがクラブの所在地を示した地図です。

ディビジョン 1 については、22 チームによるホームアンドアウェイの総当り 2 回戦です。上位 2 チームはプレミアリーグと入れ替えし、下位の 5 チームはディビジョン 2 のチームと入れ替えとなります。

ディビジョン 2 においては、変則的なレギュレーションになっています。西、南、ウラル・ポボロツィヤ、東の 5 地区に分かれていて、その各地区の優勝チームがディビジョン 1 のチームと入れ替えとなります。各地区の最下位チームはアマチュアリーグに降格となります。

ロシアプレミアリーグの有名選手及び有名監督をピックアップしました。有名な監督はアドフォカート監督です。今シーズン、ゼニトを優勝に導きました。

また、ロシア以外の国別で代表クラスの選手がどれくらいいるのかを統計を取ってみました。意外なことにベラルーシが最も多かったです。

2. ウラジオストックについて

ウラジオストックとは沿海地方南部の日本海に突き出したムラヴィヨフ・アムールスキー半島南端部に位置し、ロシア海軍の太平洋艦隊の基地がおかれる軍港都市です。人口は 594,701 人(2002 年国勢調査)。ウラジオストック市は丘陵上の市街に囲まれるようにして金角湾(ザラトイ・ログ)が半島に切れ込んでいて、天然の良港になっています。主な産業は造船業と漁業、軍港関連産業です

現地までは新潟空港より飛行機で約 2 時間かかります。

ウラジオストック周辺の地図です。ここがウラジオストックです。

ルチ・エネルギー・ウラジオストックのチームについてご説明します。1958 年に創設され、2005 年よりプレミアリーグに在籍しています。獲得したタイトルはありません。

私になぜルチ・エネルギーの試合を観戦しに行こうと思ったかということ、元々ヨーロッパのサッカーに興味があったことです。また、極東ロシアは日本に一番近いヨーロッパで身近に本場のサッカーが見られます。UEFA チャンピオンズリーグ常連のスパルタク・モスクワがウラジオストックで試合をするためでした。また、日本人が現地で試合を観戦するという事例はインターネット上でも見るこ

とはありませんでした。

観戦した試合は、去年の 8 月 19 日に行われた試合です。スターティングメンバーはご覧のとおりです。

ホームスタジアムの画像です。まだ試合が始まる前で、選手はまだ現れていません。こじんまりとしたスタジアムです。

こちらはスタジアムの関係者入り口です。軍隊が警備しているので、少しびっくりしました。

入り口からすぐ入ったところでとった画像です。日本人と違って、サポーターが集まってくるのは遅めです。

スタンドに上ってからとった画像です。私の席は中段の席でした。それなりに見やすい席でよかったです。

キックオフの時間が迫ってくるとスタジアムは満杯です。サポーターも楽しそうに待っていました。

キックオフ後の画像です。日本のクラブのサポーターよりも控えめな応援を展開していました。

キックオフしてからある程度時間が進んだ状況での画像です。それなりにサポーターは応援をしています。しかし、歌といった応援は見られません。

巨大ユニフォームです。これを見たときは少し感動しました。

こちらは去年のワールドカップで 3 位決定戦の笛をふいた上川主審です。

上川主審が日本人ということで、現地の方が日の丸を掲げたのでしょう。当初なぜ日の丸があったのか分かりませんでした。後で上川さんのことを知ってなるほどと思いました。

試合は 1-0 でルチ・エネルギーが勝利します。前半はスパルタク・モスクワが一方的にゲームを進めていましたが、カウンターからルチ・エネルギーが決勝点をあげました。

3. ナホトカについて

次にナホトカについてご説明します。ナホトカは、ロシア連邦の極東部にある商港都市です。人口は 148,826 人(2002 年国勢調査)。ロシア連邦の極東部、沿海地方に属しています。

こちらが地図で、中央にあるのがウラジオストックです。ここから皆様の右手側の斜め下にナホトカがあります。ウラジオストックから約 140 キロ離れています。

オケアン・ナホトカについてご説明します。1986 年に創設されました。92-93 シーズンにはプレミアリーグに在籍していました。現在はディビジョン 2 に低迷しています。旧ソ連時代の 1989 年にカップ戦のタイトルを獲得しています。

オケアン・ナホトカ観戦の理由として、かつて旧ソ連時代にカップ戦のタイトルを獲得しており、また 1992 年から 1993 年まではプレミアリーグに在籍していたことと、ウラジオストックの旅行を計画した際に、日程的に余裕があったからです。

観戦した試合は、8 月 18 日の 19 時キックオフの、オケアン・ナホトカ対イルティッシュ 1946 の試合です。尚、資料等がなかったため、スターティングメンバー等は不明です。

これがスタジアムの正面入り口です。住宅街の中にあるものの、木々に囲まれたスタジアムといった雰囲気でした。本当に小さいスタジアムです。

スタジアムに入ってすぐのところで撮影した画像です。キックオフの時間まで時間があるためにお客さんが全くいないです。

バックスタンドからの画像です。まだキックオフまでに時間があるため、観客はまったくいません。

キックオフ後の画像です。白がオケアン・ナホトカです。サポーターは、キックオフ直後は盛り上がっていました。

オケアン・ナホトカが若干押し気味に攻めるものの、0-0 の引き分けでした。

スタジアムに隣接していた練習場の様子です。ユース選手が試合をやっています。こちらの選手はトップチームを目指して努力しているんでしょうね。

4. ウラジオストック再訪問について

次にウラジオストックを再訪問した理由を述べます。ルチ・エネルギーが1年でどのように変化したかを見たかったのと、今回の対戦相手は中堅のサトゥルン・ラメンスコエで試合内容に興味があったからです。また、現地における選手のファンサービスに興味がありました。

観戦した試合は7月14日の19時キックオフの、ルチ・エネルギー対サトゥルンの試合です。スターティングメンバーはご覧のとおりです。

今回はバックスタンド側の席になりました。選手がアップをしています。サポーターは集まっていますが、まだキックオフまで時間があるため、まばらです。

試合中の画像です。今年は、ルチ・エネルギーはそれなりに攻撃できていました。

試合終了前にゴール裏周辺から撮影した画像です。満杯のサポーターです。

同様に、メインスタンド側を撮影した画像です。こちらも満杯です。この時点ではすでにルチ・エネルギーがリードしていたため、みんなタイムアップの笛を待っています。

試合中の画像です。

こちらは勝利直後で満足して帰宅するサポーターを撮影した画像です。

試合結果は2-1でルチ・エネルギーが勝利します。相手チームに先制点をとられてからは敗戦ムードだったのですが、同点に追いついてからは勢いがついて、ルチ・エネルギーの底力が見られました。

スタジアムの外に対戦表とおぼしきものがありました。見方はよく分からなかったです。

試合後、関係者入り口でサインプリーズと何度も叫んでいたところ、ティコノフェツキー選手がこちらに向かってきてくれて、サインを頂きました。それとPavlov監督のサインです。すごくうれしかったです。

これが今シーズンの最終の順位表です。ルチ・エネルギーは降格スレスレの14位でした。

5. ユジノサハリンスクについて

次に、ユジノサハリンスクについてご説明します。人口約17万4千人（2005年）で、日本統治時代（1905年 - 1945年）は樺太庁が置かれていました。サハリン州の州都で、州内で最大の都市です。市名は「南サハリンの町」という意味です。

ユジノサハリンスクに行った動機についてご説明します。サハリンに、久しぶりにディビジョン2に昇格したサッカークラブがあるという情報を入手しました。また、同じ極東ロシアといえ、ウラジオストックとユジノサハリンスクにおいてサッカー文化にどのくらいの違いがあるのか興味がありました。

サハリン・ユジノサハリンスクは、昇格して今年からディビジョン2に在籍しています。今シーズンは8位に終わりました。

観戦した試合は、7月28日の、サハリン・ユジノサハリンスク対イルティッシュ1946の試合です。スターティングメンバーは以下のとおりです。

こちらは試合前日、雨天の中で練習している選手です。夏だったのですが、雨天のこの日はとても寒かったです。

こちらは入り口の写真です。本当に小さいスタジアムでした。

スタジアムはガガーリン公園の中にあるのですが、公園からスタジアムを撮影した画像です。

試合前のアップの風景です。選手たちは一生懸命取り組んでいました。

メインスタンド側のスタンドです。キックオフの時間がそれなりに近づいてきています。

キックオフ直後の試合です。このときにはメインスタンドはいっぱいでした。

得点直後の撮影です。みんな大声をあげて喜んでいました。

電光掲示板です。読めないくらい小さかったです。

ハーフタイムには子どもたちが自由にグラウンドを使わせてもらえます。ファンサービスとしては良いアイデアだと思いました。

勝利直後のサポーターの画像です。みんな満足げな表情をしています。

試合は1-0でサハリン・ユジノサハリンスクが勝利します。ほぼ互角の戦いだったのですが、ユジノサハリンスクがきっちりとチャンスを決めたのが差となったようです。

ロッカールームです。少し汚かったです。

現地の人とストリートサッカーをやってきました。ロシア人が人懐っこい性格だったことにびっくりしました。

こちらは選手のサインです。サインしてもらえてよかったです。

クラブ事務所があるというツーリストホテルです。ホテルの一室内というのは意外でした。

こちらが今シーズンの最終順位表です。サハリン・ユジノサハリンスクは8位です。残留できて良かったと思います。

6. おわりに

最後に私が感じたことを述べさせていただきます。ロシアは多民族国家で、クラブにもそれが色濃く反映されていることが分かりました。日本から2時間あまりで行ける極東ロシアでもサッカーは人気スポーツでした。サポーターにとってサッカーは生活の一部であり、得点時の盛り上がり方は日本以上でした。選手のファンサービスも、日本以上にサービス精神が強かったです。観客動員数が伸び悩んでいるクラブにとって、集客力を高めるには、地域の人々との密着した交流が不可欠なのではないかと思いました。

極東ロシアのサッカーレベルはUEFAチャンピオンズリーグ出場のレベルではないが、交流戦など東アジアとの関係を深めていけば、ともに徐々にレベルアップしていくのではないかと思います。これを機会に極東ロシアのサッカー観戦をしてはいかがでしょうか？

ご清聴ありがとうございました。

第2部：バヌアツ共和国で感じたこと

岸卓巨（中央大学4年・DUOリーグ事務局）

※この報告の内容は、岸卓巨がバヌアツで体験したことや、現地の人から聞いた情報を、いくつかの文献をもとに構成したもので、裏づけが取れていない情報も数多くあることをご理解ください。

はじめに

DUOリーグ事務局長を務めております、中央大学4年の岸卓巨です。よろしくお願いします。

今回は、「バヌアツ共和国で感じたこと part 2」と題して、私が去年（2006年）と今年（2007年）の計1ヶ月ほど、南太平洋のバヌアツ共和国に行って感じたことや、その後調査した内容について、スポーツ事情を中心にお話しさせていただきます。バヌアツ共和国については、昨年11月の月例会でも紹介させていただきましたので、ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、初めて耳にする方も多いかと思うので、前回発表した内容の振り返りから始めたいと思います。

I. 昨年度のレビュー

1. バヌアツ共和国とは

1) 地理

バヌアツ共和国は、南太平洋に浮かぶ人口約20万人、面積はほぼ新潟県程の島国です。83の島々から形成されています。その中で私は、首都であるPORT VILAのあるEfate島と、人口・面積でバヌアツ第2の島と呼ばれるSant島に行ってきました。ちなみに、Efate島には国際空港があり、フィジーやオーストラリア・ニューカレドニアより、飛行機で行くことができます。

バヌアツ共和国は、地域としてはメラネシア地域に属しています。メラネシア地域に属する他の国としては、ニューカレドニア(174)、ソロモン諸島(162)、バヌアツ共和国(165)、フィジー(153)、パプアニューギニア(177)があります。括弧内の数字は、FIFAランキングを示していますが、これは、昨年サロンで発表した時点のもので、現在は、ニューカレドニアが119位、ソロモン諸島が125位、バヌアツ共和国が141位、フィジーが133位と、パプアニューギニアが183位に下がってしまった以外はほとんどの国で順位の上昇が見られ、この結果からは、この地域全体のサッカーレベルは少し上がったのではないかと感じています。

2) 歴史

バヌアツの歴史で注目すべき点は、1906年にイギリスとフランスによって共同統治合意が行われたということが挙げられます。この共同統治は1908年まで続きましたが、バヌアツでサッカーが盛んになったのも、宗主国であった、イギリス・フランスの影響が大きいようです。

近年では、2006年7月にイギリスのシンクタンクによって「地球上で最も幸せな国」に選ばれました。この点については、また後ほどお話しします。

3) 日本とバヌアツ共和国

日本とバヌアツは意外に関係が深く、直行便がないため、まだまだ日本人の観光客は少ないですが、多くの協力隊員が、学校の教師や村落開発員などさまざまな分野で送られている他、2003年にはオー

ストラリア、ニュージーランド、フランスに次いで4番目の経済協力実績があります。日本人のいる旅行社、日本食店はバヌアツ国内に各1店舗あります。調べたところ、日本の縄文土器がバヌアツで見つかったという不思議な歴史的つながりもあるようです。

現在どのくらいの協力隊員がバヌアツ国内にいるのかを調べたところ、2005年9月現在、青年海外協力隊は、派遣中の隊員が20名、派遣実績124名、シニア海外ボランティアは、派遣中が7名、派遣実績11名とのことです。活動分野としては、教育・医療・コンピュータ・経営管理・観光・村落開発員などさまざまです。

私が、去年からバヌアツに興味を持ち始め、元協力隊員や現地でダイビングショップを運営されている方などいろいろなバヌアツ関係者とお話して感じたことは、バヌアツについて詳しい日本人は、どこかで必ずつながっているということです。話している中で、共通の知り合いなどが随分と出てきました。

4) バヌアツ人の言葉・ビシュラマ語

バヌアツ共和国の人々は実に多くの言葉をしゃべります。まず、村によって独自の言葉があります。これは、長年村同士、部族同士の争いが激しかったためだと言われています。しかし、1800年代後半、バヌアツの人々がサモアやフィジーにあるプランテーションや、ニューカレドニアのニッケル鉱山に出稼ぎに行った際、それぞれが異なった言葉を話しているのでは都合が悪い。そこで生まれたのが、ビシュラマ語です。ビシュラマ語は、英語を簡単にしたような言葉で、例えばtrackもcarもbusも全てビシュラマ語ではtrackと呼びます。つまり、trackが迎えに来ると言った場合、迎えに来るのが、しっかりとドアも屋根もあるバスなのか。それともトラックの荷台に乗せられるのかは分かりません。さらに、私のことはmi、あなたはyu、そして私とあなたを合わせた私たちはyumiと呼ばれ、英語のように主格や所有格などの区別はありません。疑問文は肯定文の語尾を上げるだけ。過去形は語尾にfinish、未来系は文頭にbaeを付けるだけです。このようにビシュラマ語は、英語が苦手な文法に悩んでいる中高生が喜んでしまいそうな言葉で、自分も去年と今年の計1ヶ月ほどバヌアツに滞在し、だいぶビシュラマ語をマスターできたと思います。バヌアツ人は他にも、長らくイギリスとフランスによる共同統治が行われていたため、英語やフランス語を話す他、自分の村の言葉や結婚相手の村の言葉など5つ位の言葉を操ります。学校は、英語で授業を行う学校とフランス語で授業を行う学校があるようです。

3. 昨年バヌアツ滞在について

昨年は、2006年8月31日～9月16日まで、SCIというNGO主催のワークキャンプに参加してバヌアツ共和国を訪れ、現地の学校建設や、村対抗戦での審判、村での審判講習会などを開催してきました。ワークキャンプの概要について簡単に説明しますと、滞在場所は、バヌアツ共和国エファテ島のエパオ村です。このエパオ村は、リゾートホテルもある首都ポートビラとは対比的に、とても観光とは程遠い、自給自足の生活を送るのんびりとした村です。この島に滞在し、オーストラリア人4人、日本人6人、ドイツとスイスからそれぞれ1人ずつの合計12人のキャンプ参加メンバーとともに、日本のODAで建設される学校の建設援助に行ってきました。そもそも私がバヌアツを知るきっかけとなったのは、大学のゼミの担当教授が、以前、青年海外協力隊として、バヌアツサッカーナショナルチームでコーチをやられていた方で、バヌアツに行きたいということを話していたところ、このワークキャンプを紹介していただき、参加した次第です。

昨年の夏休みにはじめられた学校建設ですが、当初は昨年中に完成する予定でしたが、雨が降ったら仕事をしない、部品が届かなくて仕事をしないなど、本当にのんびりとしたペースで仕事が進められ、結局、完成の報告を現地に住むシニア協力隊の方に送っていただいたのは、今年の夏休みでした。

1) エパオ村の人々

ここで、エパオ村の人々に共通した特徴をお話しします。まず、GDP水準など経済的には極貧国に当たりますが、自給自足で欲のない生活を送るバヌアツの人々に、貧しさは全く感じられません。宗教はキリスト教で、食事の前などにはお祈りをし、日曜日は休日です。私が訪れたエパオ村の人々の年代別特徴としては、子供はとても人懐っこく、歌が大好き。私にもいっぱい歌を教えてくださいました。若者は、逆にシャイで、サッカーを通して親しくなるまでは、なかなか会話をすることが難しかったです。それに対して、おじさんおばさんにはとにかく話好きな人が多く、村のチーフの挨拶などでも、どうしてそんなに話すことがあるのかと疑問に思うくらい話が長かったのが印象的でした。

今回、2度目にエパオ村を訪れたのですが、自分のことを覚えてくれているかどうか、行くまでは不安でした。しかし、バスで村に到着した途端、子供たちがやってきて、大人の人たちも自分のことをしっかりと覚えてくれていて、日本ではあまり知られていない国の小さな村に自分を「タクミ」と親しみを込めて呼んでくれる人がいることにとてもうれしさを感じました。今回は、4日間ほど、サント島でバヌアツ人の家にホームステイしてからの訪問だったため、自分も去年よりビシユラマ語を話せるようになっており、村の人ともたくさん話すことができた他、小学校の授業を見学していたところ、「3・4年生は次の時間、タクミとスポーツね」と先生に話しを急遽振られる場面もありました。

2) 私が（昨年）体験したバヌアツサッカー

ここからは、私が昨年バヌアツで体験したサッカーについてお話します。

日常のサッカー

日常的なサッカーシーンについて子供と大人に分けて説明します

<子供たちのサッカー>

日本で使われているようなしっかりとしたサッカーボールは町に行かないと手に入らない上に、値段もバヌアツの人々にとっては高い。そこで、子供たちがいつも使っているのは、バルーンと呼ばれるやわらかいゴムボールです。子供たちはとても人懐っこく、「プレプレバルーン」と言って、私が仕事をしていない時は頻りにサッカーに誘ってきてくれました。子供たちと遊んでいて驚かされるのは、子供たちの足の強さです。砂利混じりのグラウンドでも海辺の岩場でも、平気で裸足で走っているのを見て、自分も子供たちと同じ条件で遊ぼうと思い、靴を脱ぐのですが、石が足裏に刺さって、なかなか走れませんでした。

ここまでは昨年感じたことなのですが、今年、子供たちのサッカー風景が少し変化していることに気がつきました。それは、いくつかしっかりとしたサッカーボールが入ってきたため、そのボールで遊びたい高学年の子供たちが、幼稚園児など、以前は一緒にゴムボールで遊んでいた小さな子供たちと別れて遊びたがることがあるのです。これは、いつもという訳ではありませんが、時々このような光景を目にし、少し残念な気持ちになると同時に、ただ闇雲にボールを与えるような援助の是非について考えさせられました。

<大人たちのサッカー>

大人は子供たちとは対照的に、しっかりとしたサッカーボールを使います。靴はスパイクを履く人もいれば裸足の人もいます。レベルはというと、毎日仕事が終わった5時から日没まで、デコボコのグラウンドでボールを蹴っているので、個人の基礎的な能力は低くないと感じました。身長も高く、当りは強いです。私も一緒にゲームに参加させてもらいましたが、チームを分けるビブスもなければ、瞬時に顔の区別をすることもできないので、誰が仲間なのかを判断することがとても難しかったです。

大人たちのサッカーでビックリしたのは、日没でゲームを終えた後、横一列に並び、ダッシュやブラジル体操など、現在日本でも行われているようなクールダウンをしていたことです。エパオ村サッカーチームのキャプテンに尋ねたところ、これは以前ボランティアでエパオ村を訪れたアメリカ人が教えてくれたとのことでした。

East Efate League 開幕記念試合

毎日仕事が終わってから大人たちとサッカーをしていたところ、自分が滞在中の土曜日に、近くの村で村対抗のサッカー大会があり、そこで審判をやってみないかと誘われました。海外で審判ができるチャンスなんて滅多にないだろう。他のキャンプメンバーは既に、泊りがけで近くの島へ遊びに行くことを決めていたため、自分だけ別行動をすることに多少申し訳ない気持ちはありましたが、せっかくバヌアツまで来ているのだから、現地の人々とできるだけ一緒に過ごしたいという気持ちもあり、村のサッカーチームと一緒に大会に出場することにしました。

当日まで知りませんでした。この大会はエファテ島の東側にある4つの村が集まって、来年から行われる East Efate League の開幕記念試合とのことでした。これまでエファテ島では、北部の North Efate League、最もレベルが高い首都を中心とする Port Vila League の2つが行われており、2007年7月から East Efate League が加わり、3つの地域リーグが行われる予定らしく、地域リーグで勝ち上がると Provice League と呼ばれる上位リーグに出場できるようです。

East Efate League の特徴としては、サッカーと共にバヌアツで大変人気のあるバレーボールのリーグが同時開催されることや、VPM(Vanuatu Project Management)というスポンサーがいることなどが挙げられます。VPMがどのような組織なのか、詳しくは分かりませんが、VPMの人と話した様子では、アメリカ企業の地域貢献事業のようです。バヌアツでは法人税が掛からないため、アメリカの企業などがバヌアツに現地法人を設けていることがよくあり、このような企業が、地域への貢献を目的として、今回のケースのように村の支援などを行う場合があります。VPMは、大会用に森林を切り開いてグラウンドを整備した他、全ての出場する村に2セットずつユニフォームやボールを支給していました。大会で優勝したエパオ村には賞金も与えられました。

この大会でエパオ村は、サッカー・バレーボールともに優勝し、帰りのトラックではみんなご機嫌でした。この大会出場を通して村の人たちとかなり親しくなれたと思います。この日のカバの味は忘れられません。

エパオ村でのルール講習会

大会に出場してみて、エパオ村の人々がサッカーの国際ルールを知りたがっているのに、それを学ぶ機会がないということ、また、ルールが分からないがゆえに審判をやりたい人が多いうことを感じたため、村の中でルール講習会を行いました。各エリアの説明など基本的なことから、フリーキックの時に審判が手を挙げるのは壁の枚数を指定するためではなく、間接フリーキックの合図であることなど、大会で分かったルールの誤解についても説明しました。英語や、時にビシュラマ語を用いて行ったのですが、とても熱心にメモを取りながら自分の話を聞いていただき、とても感動しました。

4. バヌアツサッカー事情

ここからは、小林勉著「南太平洋の島から「世界」へ：FIFAサッカー振興計画の展開と受容」(季刊民俗学117号)を参考文献として、帰国後に調べたバヌアツサッカーの歴史などについてお話しします。

オセアニア地区には、ラグビーが盛んな国が多いですが、バヌアツは、宗主国であるイギリスとフランスの影響を強く受けており、ラグビーよりもサッカーの人气が高いです。英仏統治領ニューヘブリデスとして知られていた頃には、フランスサッカーとの結びつきが特に強く、1964年には、フランス系の

市民を中心にニューヘブリデスサッカーリーグが結成され、1974年から1979年にはバヌアツのクラブがフランスカップに出場していたようです。

独立後は、「Vanuatu Football Federation」と名称を変え、FIFAに加盟したのは1988年。1991年には、ワールドカップ予選にもバヌアツ代表として出場。それ以降、これまでのワールドカップ予選には全て参加してきました。ドイツワールドカップ予選では、オセアニア地区で2次予選敗退という結果を残しました。バヌアツは多くの面でさまざまな国の支援を受けていますが、サッカーについてもFIFAの支援を数多く受けています。

1) 1999年 Juan CarlosがFIFAより派遣される

Juan Carlosは、ウルグアイ出身のFIFAインストラクターです。彼は、バヌアツに派遣され、村と村の密接なコミュニケーションが行われていないことや、スパイクを買うお金もない選手がいるような財政面での困難を乗り越えながら、バヌアツのサッカー環境を大きく変化させました。

例えば、彼は5年間でサッカーの能力を高めるプログラムを考え、新しいコーチングシステムづくりや小学校でのサッカー指導、中学校での試合の活性化など、年代別にサッカーを学ぶ環境を整えました。また、元ナショナルチーム選手のJacques Seseが教育・青少年スポーツ省の大臣だったため、このプログラムを学校のカリキュラムに組み込むことができました。

2000年のオセアニアネーションズカップでは、バヌアツ代表がオーストラリア代表を1-0で破るという快挙も成し遂げました。

2) 2001年 FIFA “Goal programme”

Goal Programmeとは、1999年からFIFAによって展開されている途上国支援プログラムで、トレーニングセンターやサッカーアカデミーの設立、天然芝ピッチの造成など、現地のサッカー協会自身が振興計画を立て、FIFAが直接的に資金援助を行うものです。バヌアツでも2001年からこのプログラムが行われています。当初、バヌアツ共和国サッカー協会が立てた振興計画には次のものがありました。

①サッカーアカデミー建設

ここでは、サッカーの技術向上だけでなく、健全な青少年育成も目標とされた。

②2005年までに少なくとも2人の選手が海外に移籍する

③2010年までに国際的な認知度を上げる

しかし、実際には建設用地の取得問題や財務担当者の横領疑惑などで、計画通りにはならなかったようです。また、サッカーを通じた健全な青少年育成についても、選手の競技力向上により国際試合で良い成績を収め国際的な認知度を上げることに重きが置かれたため、理想と現実にはギャップがありました。それでも、バヌアツサッカー協会の事務所が2階建て専用オフィスへと移転し、有給の専属職員が増員され、プロのコーチも派遣されるなどFIFAからの援助が与えた影響は小さくありません。現在では、数名の選手がオーストラリアのブリスベンをはじめとした近隣諸国のチームに移籍しています。

3) 2003年 女子のバヌアツ代表が国際戦デビュー

Goal Programmeと並行して行われたFIFAからの援助として、FIFA Financial Assistance Programme(以下FAP)が挙げられます。FAPは、女子サッカーやフットサル、審判部や医科学部といった部門を協会組織の中に設置し、より効率的な運営体制を構築することを目的としたFIFAからの財政援助で、バヌアツではこのような援助のもと、「VISION VANUATU 2003~2006」が制定され、2003年には女子のバヌアツ代表が国際戦デビューを果たしました。

以上のように、バヌアツ共和国のサッカーは、かつては宗主国であるフランスやイギリスから、現在は FIFA から多くの援助を受けながら、発展してきました。しかし、バヌアツののんびりとした国民性は、サッカーの場面でも変わりません。日本人のように集合時間には全員揃い、少々厳しい練習でも大会に向けて我慢してやるようなスタイルは期待できないのが現状のようです。

II. バヌアツ共和国で感じたこと part 2

ここからは、今年の6月に再びバヌアツを訪れた時に調べた内容を中心にお話します。

なぜバヌアツが世界一幸せな国に選ばれたのか

バヌアツは、2006年7月にNEFというイギリスのシンクタンクによって、世界一幸せな国に選ばれました。私自身、計2回バヌアツを訪れ、バヌアツ人の笑顔や、欲のないのんびりとした生活に「幸せ」を感じましたが、どうしてバヌアツが世界一幸せな国に選ばれたのか詳しく知りたいと感じ、調べてみました。



ホームステイしたサント島の家族

この幸せな国をランキングする指標として、NEFは幸福度指数というものを使用しています。幸福度指数とは、「あなたは生活に満足していますか？」という質問に対して、その国の国民が主観で答える生活満足度とその国の平均寿命を掛けたものから、今の暮らしを続けるために必要な資源の1人当たり面積を割った数字で表されます。

今の暮らしを続けるために必要な資源の1人当たり面積というと難しいように感じますが、例えば、食べるための作物を作るのに必要な田畑の総面積や、車から排出される二酸

化炭素を吸収するために必要な森林の総面積などを合計したものです。

これらのことから、幸福度指数が高いバヌアツとは、①精神的に豊かな生活を送っている人が多く、②比較的長生き（バヌアツの平均寿命は68.2歳）で、③自然にやさしく持続可能な生活をしている国だと言えるでしょう。ちなみに、このランキングでは、2位はコロンビア、3位コスタリカ、4位ドミニカ、日本は95位、アメリカは150位だったようです。

Bong Shem

今回、2回目にバヌアツを訪れた目的としては、1回目にバヌアツでサッカーが非常に盛んなことを知り、もっとバヌアツのサッカーについて知りたいと感じたことや、前はエパオ村のあるエファテ島でしか滞在できなかったのが、他の島の生活も体験してみたいと感じたことが挙げられます。そこで今回は、知人からの紹介で、サント島に住むBong Shemという、元サッカーバヌアツ代表選手の家ホームステイさせていただきました。

上の写真の右端にいるのがBong氏です。Bong氏は、アンブレム島出身で、現在はサント島に住んでいます。年齢は30代前半で、奥さんも元女子代表選手とのことでした。Bong氏は、ケガにより代表を引退し、現在は、サント島のユースチームや、プロビンスという地域の代表チームの指導を行っています。これらの活動は、サントサッカー協会の支援を受けて行っていますが、報酬はほとんどなく、現在はほぼ無職だと本人は言っていました。無職でも生活できるのが、バヌアツらしいといえばバヌアツらしいのですが。

Bong氏が話している中で、とてもうれしそうだったのが、2006年にTahitiで行われたAll South

Pacific Council for KIDS にバヌアツ代表として参加したことです。近隣諸国から数名ずつ参加し、子供への教え方やカスタムダンスを勉強してきたと話していました。(※このイベントが本当に Tahiti で行われたのかは、裏づけが取れていません)

サント島の観光スポット

私がホームステイしたサント島の特徴についてお話します。サント島は、バヌアツ第 2 の島と言われ、数多くの観光スポットもあるため、オーストラリア人などを中心に、訪れる観光客も多い島です。観光スポットとしては、波によって反射する光がシャンパンのように輝いて見えることから名づけられたシャンパンビーチ。世界の絶景 100 選としてフジテレビでも紹介されたことのある真っ青な池、ブルーホール。そして、日本では危なくて実施できないような岩場やジャングルを抜けて洞窟探検に行くミレニウムケーブなどが挙げられます。

サント島の産業

サント島の主要な産業としては、コプラと呼ばれる、ココナッツオイル製造が挙げられます。また、日本の企業との関係も深く、ニッチクという日本の会社の広大な牧場があったり、かつては海産物関係の日本企業も数多くあったようです。

サント島の生活

サント島に行って驚いたことは、携帯電話やテレビのある家があるということです。去年エファテ島に行った時には、首都ポートビラには、電気屋やリゾートホテルもありましたが、エパオ村では、電気はソーラーパネルやジェネレーター。風呂も水浴びのみという生活を送っていたので、おそらくサント島でも、このような生活をしている人は限られているかと思いますが、村人の家にテレビがあったり、携帯電話のカメラで写真を撮る子供を見たときは驚きました。

携帯電話はプリペイド式で、テレビは衛星放送のようです。テレビでは、フランス系のチャンネルで主要なサッカーの試合も放送され、ワールドカップも見たとっていました。



サント島の学校

Bong 氏が島内の学校を回って、サッカー指導を行っているのに連れて行っていただき、Santo East School というサント島の学校を見学してきました。

サント島には、英語で授業を行う学校と、フランス語で授業を行う学校がありますが、この学校は、英語系の学校で、幼稚園と小学校が併設された、サント島内でも大きな方の学校です。この学校に行って、まず驚いたことはスポーツ設備が充実していることです。コンクリートで地面を固められたバスケットコートやバレーボールコート。フットサルコートもありました。その周りには芝生の大きなグラウンドもあります。

現地で聞いた話によると、各学校、例えば毎週水曜日の午後など、カリキュラムの中に毎週スポーツの時間を設けているとのことでした。しかし一方で、以前サント島で協力隊として学校の先生を務

めていた方の話によると、スポーツを行う時間があっても、体育を専門とする教師が十分に養成されておらず、他の科目の教師が相談して、メニューを考えているようです。Bong 氏と一緒に学校に行った時も、前もって行くことが学校側に連絡されていた訳ではなく、突然訪問して、その場にいる子供たちを集めてサッカーをしたような印象でした。



バスケットボールコート



バレーボールコート



フォーメーションを教える Bong 氏

土曜日のリーグ戦

サントではどのようなサッカーが行われているのか気になったので、Bong 氏に尋ねてみました。まず、毎週土曜日には、リーグ戦が行われているとのこと。毎週土曜日に午前中は、U-14 から U-20 までのユースの試合（各年代 5～15 チーム）が行われ、午後は 3 部・2 部・プレミア（それぞれ約 8 チーム）のカテゴリ別に大人の試合が行われます。どのようなメンバーでチームを構成されているかと言うと、在バヌアツ中国人チームや、Bong 氏のように他の島からサント島に移ってくる人も多いため、同じ島の出身者を中心としたチーム、ダイビングショップなど同じ会社のメンバーで作ったチームなどがあります。

プロビンス代表

また、サント島で選抜されたメンバーは、プロビンス代表として 2006 年より年 2 回ずつ、どこかの島で行われているプロビンス代表の大会に出場します。プロビンスとは地域の集まりで、高体連に例えると、文京区・豊島区・足立区・中央区が集まって 2 地区代表を形成するように、Santo 島と Malo 島が集まって Sanma 代表、Pentecosta 島と Ambrym 島と Maewo 島が集まって Penama 代表を形成します。他にもいくつかのプロビンスがあり、それらの代表チームによる大会が行われます。

この大会では、1 つのチームが約 3 試合行いますが、大会が行われる島と自分の住む島の間を、各島々をまわる船で移動するため、かなりの日数がかかる大きなイベントとなります。

ユース育成環境



次に、バヌアツでは、どのようなユース育成が行われているかご説明します。まず、首都であるポートビラやサントでは、U-8～U-14 をバヌアキッズプログラム、U-16～U-20 をバヌアユースプログラムと題して、各学校を回っての指導や、各学校での優秀な選手の発掘、各年代での代表チーム形成などを行っています。これらの活動は、男子だけでなく、女子に対しても行われているようです。Bong 氏が行っているものも、これら

のプログラムの一部です。しかし、サントでは、サントサッカー協会主導で行っており、指導者はほぼ無償ボランティアであるとの話でした。そのため、Bong 氏は、自身が行っている育成事業を、バヌアツサッカー協会やオセアニアサッカー協会からの委託事業として行いたいと考えており、それぞれの協会に手紙を送っていますが、良い返事はないそうです。

また、ユースの大会としては、サント島では、学校大会のサッカー大会が行われている他、オーストラリアユース代表チーム・ニュージーランドユース代表チーム・ポートビラユース代表チーム・サントユース代表チームが集まり、Sports well tour という代表チームの大会が年1回行われています。Bong 氏の話では、前回大会はポートビラで行われ、サントチームは好成績だったそうです。

ビラにおけるサッカーの現状



話を首都であるポートビラ（エファテ島）に移します。サント島からエファテ島に戻ってきた日が土曜日でエパオ村に行くバスを待つ間に時間があつたので、ポートビラにあるサッカースタジアム「MUNICIPAL STADIUM」に行ってきました。

私がスタジアムに行った時は、ちょうどユースの試合が行われており、驚いたことは、しっかりとした観客席があることと、グラウンドの周りにいくつかバナー広告が置かれていることです。エパオ村に比べたら、サントでもレベルの高いサッカー環境が整っていると感じましたが、ポートビラには、さすが首都

だと思えるスタジアムがありました。

帰国後に調べたところ、このスタジアムでは、先月11月17日に、2010年のワールドカップに向けた予選リーグの試合が行われ、ニュージーランドがバヌアツを2-1で破ったそうです。ポートビラには、このスタジアムの他、もう1つ大きなスタジアムがあります。

Port Vila League

そんなポートビラで行われているリーグ戦は、プレミア・1部・2部・3部の4部構成で、水曜日夜・木曜日夜・土曜日に行われています。このリーグは、バヌアツ国内で最もレベルが高く、TAFEA というチームは、オセアニアクラブチャンピオンシップに進出し、決勝でオーストラリアのチームに惜しくも負けてしまいましたが、オセアニアで2位という結果を残しているそうです。このリーグでも、昨年経験した East Efete League と同じように、スポンサーがいるチームはしっかりとしたユニフォームがあるなど、スポンサーの影響は大きいようです。また、レフェリーについては、ポートビラには、後ほど紹介する F I F A 公認の国際レフェリーもおり、リーグ戦は国際ルールに従って行われる他、レフェリー講習会なども行われています。これは、エパオ村の人々が、国際ルールを知りたがっていたのにも少し影響しているのかもしれませんが。

ポートビラのユース代表がフランスへ

ポートビラでは、毎週土曜日の午前中に、20分ハーフでユースの試合が行われており、調べたところ、Saint Joseph school というポートビラにある学校のチームが、サッカーでフランスに進出したことが分かりました。

そのフランスに進出することになった大会は、Danone Nations Cup という10～12歳の F I F A およびフランスサッカー連盟公認の国際大会です。この大会はジダンが後援していることでも有名で、40ヶ国の代表がフランスで試合を行いました。2007年大会は2007年6月29日から7月1日まで、フランスのリヨンにあるジェランスタジアムを中心に行われました。日本からは、東京ヴェルディ1969 ジュニアチームが日本代表として参加し、最後はフランスに敗れて7位。大会ベストチーム賞受賞という結果を残しました。

この大会にバヌアツの Saint Joseph school が出場することになった経緯は次の通りです。

まず、バヌアツ国内で行われた Vanuakids Primary School competition で勝利し、バヌアツ代表としてパプアニューギニアで行われた U-12 Festival of Football に出場。ここでは、ニュージーラン

ドや、パプアニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ、ニューカレドニアから各国代表チームが集まり、試合に加え、カスタムダンスなどの文化交流も行われたようです。Saint Joseph school はここでも優勝し、フランス行きの切符を手に入れました。

Danone Nations Cup 本番では、予選リーグの結果から 17～32 位トーナメントに進出。トーナメントでは、アイルランドに勝ち、最後はポーランドに敗れ、19 位という結果を残しました。日本のような育成システムの整った国の中で、新潟県ほどの面積のバヌアツ共和国の代表が、40 チーム中 19 位という結果を残したのは驚きです。また、海外に行くことが日常になってきている日本の子供に対して、海外にいくなんて夢のまた夢、他の島に行くことすら滅多にないバヌアツの子供にとって、サッカーを通してフランスまで行けることはとても価値のあることです。

サント島とポートビラ

最後に、私が今回訪れたサント島とポートビラのサッカー環境の違いについて、現地で出会った 2 人の方のお話から比較したいと思います。

まずサント島については、ホームステイさせていただいた Bong Shem さんの言葉です。「サント島には十分なピッチやお金がない。ゴールプロジェクトについては知っているが、サントまでお金は来ていない。ユースの育成プログラムについて、サントサッカー協会からは報酬を得ているが、今後はバヌアツサッカー協会からの委託事業としてやっていきたい。」

これに対して、ポートビラで出会った Harry Allison さん（サッカーの国際審判員として、国際試合の経験もある）の話によると、「ポートビラは特にサッカー環境についての不満はない。協会でフルタイムで仕事をしている。FIFA やスポンサーからの援助もある」とのことでした。

これら 2 人の話には個人の主観も含まれていて、これがそのままサント島とポートビラのサッカー環境の差を現しているとは言えないでしょう。しかし、現地の方が感じていることを話してくれた言葉であるので、全く否定もできないと思います。

また、1 つ言及しなければならないことは、これらの言葉を語っていただいた時の両者の表情は、決して暗い訳ではなく、Bong Shem さんもネガティブな意味で話しているとは感じられなかったということです。

日本では格差社会が問題になっていますが、バヌアツでは、住む島や住む村によって格差はあるものの、それは単なる「違い」であり、決して他より劣っているから幸せではないと感じることではないようです。

今回の旅で、改めてバヌアツの人々の欲のない寛大な心を感じることができました。

<参考文献>

「南太平洋の島から「世界」へ：FIFA サッカー振興計画の展開と受容」小林勉著（季刊民俗学 117 号 46～51 ページ 千里文化財団）

<http://www.fifa.com/index.html>(2007.12.29)

<http://www.oceaniafootball.com/>(2007.12.29)

<http://www.rexgroup.co.jp/map.html>(2007.12.29)

http://www.sportingpulse.com/assoc_page.cgi?assoc=1005&name=Vanuatu%20Football%20Federation&client=%40%40%40%40%40%40%40%4013%40%40%40(2007.12.29)

<http://www.jica.go.jp/vanuatu/activities/index.html#01>(2007.12.29)